

「ぶんせき」の魅力と信頼性



四 宮 一 総

「LC () MS の () 内はハイフン (-) か、スラッシュ (/) か?」。一つの用語を巡ってこうした議論が白熱し、^{こうろんわつぱく}甲論乙駁した末に本誌は毎号会員のもとへと旅立っていく。縁あってその只中^{ただなか}に身を置いて久しいが、編集を通して感じたことは、機関誌としての「魅力」と「信頼性」を維持することがいかに大変かということである。

情報伝達媒体の多様化により、伝えるべき内容に応じて手段が選別されるようになった。本誌は、言うまでもなく、冊子という紙の媒体である。この最大の「魅力」は、コンピュータのような電子媒体とは異なり、「箱」の中の情報を積極的に探し求める必要がないということである。好むと好まざるとにかかわらず、情報のほうから飛び込んでくるのであり、当初は興味も関心もなく何気なく読んだ掲載記事であっても、後になって思い出し、改めて読み返した経験は誰にでもあろう。また、旬とまではいかなくともある程度新鮮でしかも時間の「ふるい」にかけられた情報が得られることも「魅力」の一つである。耳に届けばすぐに役目を終えるニュースのような情報も大切であるが、本誌の掲載記事の多くは、たとえ「最新」情報であっても執筆者の経験に裏打ちされた視点が加えられており、その意味では長期の保管に耐えられる記録性のある「読み物」と言えよう。本学の図書館にも毎年の本誌が製本され、所蔵されている。古い巻をひも解いてみると、今日でも「魅力」の失せていない記事が少なからずあり、むしろ執筆者の先見性には驚かされるほどである。

一方、この「魅力」を支えているのが、「信頼性」である。掲載記事の「信頼性」が個々の執筆者の努力に依存しているのは言うまでもないが、今日、本誌に高い「信頼性」があるのは、歳月を経たその積み重ねによるものであろう。上述のように、編集委員会では用語一つにも意見を述べ合うことがあるが、それは、執筆者の意向を最大限に尊重し、かつ原稿の趣旨をできるだけわかりやすく、より科学的に正確に読者に伝えようとする編集委員の熱意にはかならない。編集委員は執筆者の手元を離れて一人歩きし始めた原稿の最初の読者であり、原稿が記事になるまでの言わば「介添え役」である。掲載記事の「信頼性」はその過程ではぐくまれ、「査読」システムもそのためにこそ存在している。少し前になるが、ホームページアドレスの「文献」欄への掲載の可否について編集委員会で検討したことがあった。結論から言えば、原則として認めないことになったが、その根底にはホームページに対する「信頼性」があったように思う。情報源として利便性も高く、内容に「信頼性」のあるものも多いが、あくまで「期間限定情報」であり、その点が「信頼性」を比較的長期にわたって担保する上で本誌の性格に合わないとした大きな理由であらう。

最近、事務局の努力により過去の掲載記事の「執筆者リスト」が整備された。これも特定の執筆者に偏らず、できるだけより幅広い会員の参加を期待してのことである。本誌の「魅力」と「信頼性」は会員をはじめ多くの方によって維持されているのであり、今後も一層の御助力を賜われれば幸いである。

〔Kazufusa SHINOMIYA, 日本大学薬学部, 「ぶんせき」編集副委員長〕